

タイトル	帰去来の辞
著者	村山， 出
引用	北海学園大学人文論集， 26・27： xiii-xiv
発行日	2004-03-31

帰 来 の 辞

村 山 出

まず、大変お世話になった人文学部教職員の皆さまに、心からお礼申し上げます。

就任の時は5年間の予定でしたが、結局は9年間つとめさせていただきました。それだけに皆さまに対する感謝の念は深いのですが、振り返ってみますと、むしろ何かとご迷惑をおかけしたことが多く、まことに申しわけなく存じております。

決して長いとはいえない在職期間に、大学全体として教育課程改革にともなう教養部改編が進められ、そのさなかに、人文学部はさまざまな紆余曲折を乗り越えて、大学院文学研究科日本文化専攻修士課程を新設し、引きつづき博士（後期）課程の設置、さらに英米文化専攻修士課程の新設を実現しました。まだ歴史の浅い人文学部のめざましい発展期にめぐりあったことを、今不思議な思いで回顧しています。

大学院設置は、人文学部創設の最大の功労者でいらっしゃる菱川善夫先生の毅然としたご指導のもとに、教職員が多大の協力を惜しまずに得たかけがえのない結果です。この機会に教員組織の一層の充実を見たことが本学部学生の教育と研究の将来にどれほど有益であるかを考えますと、まことに喜ばしい限りです。今後の発展の基礎が整いつつあることを、学部として大いに誇りにすべきだと存じます。

私の教員生活はこの3月末日でちょうど満50年になります。北大の研究室から勧められて学部4年生の10月に札幌市近郊の石山高校定時制の非常勤講師になったのを振出しに、学部卒業と同時に同校専任として1年間、翌年母校の札幌西高校定時制に呼ばれて8年間（この間に北大大学院に在籍）、その後は旭川工業高専で7年間、帯広大谷短大で11年間、小樽商大

で14年間（定年退職）、そして本学の9年間と、一步一步鈍牛の如く歩んで来ましたが、私には国公立各種の学校の事情を知る貴重な体験となりました。

ところで、私の学生時代のこと。北大の国文学科に所属すると、主任の風巻景次郎教授を守護する四天王のような英才が揃っていました。それが後の本学教授、菱川善夫・千葉宣一・山根對助・故近藤潤一の諸先生でした。当時既に、菱川先生は前衛短歌の評論家として著名で、筆鋒の鋭さに全国の歌人から畏敬の念を抱かれておりました。千葉先生は哲学青年で詩人評論家として重きをなし、山根先生は国立大学としては珍しい総合誌『北大季刊』の編集者（後に本学では『北海道から』の編集者）として活躍され、近藤先生は俳人評論家としても勇名を馳せていました。大変な論客が揃って風巻研究室を占拠（？）しておられたわけで、小邪鬼の私はとても近づきがたかったものです。しかし卒業後に、北大助手の山根先生は私の旭川高専転勤の折にお骨折り下さり、その赴任先では菱川先生に公私にわたり大変お世話になり、帯広時代は帯広畜大教授の千葉先生と令夫人に大谷短大の非常勤講師としてご助力願ひ、小樽時代には北大附属図書館長の近藤潤一先生から何かとお引き立ていただくなど、私の人生の節目々々でお支えいただきました。本学に関係深い諸先生のことなので、この機会に触れさせていただき、深謝申し上げたいと思います。

今後の万葉研究の分野では、精緻で着実な成果をあげておられる小野寺静子教授がご指導下さるので、全く後顧の憂いがないのも大変にありがたいことで感謝しております。

これからは、できるならばささやかな晴耕雨読の生活を貫き、時には日本の自然を尋ね歩き、その美しさを心ゆくまで味わいたいと考えています。

最後に、皆さまのご健康とご活躍と、人文学部のますますの発展を心からお祈りします。